由紀恵

千原樹　宇宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
由紀恵

【Ｎコード】
Ｎ０９７８Ｃ

【作者名】
千原樹　宇宙

【あらすじ】
青森県津軽出身の２１歳の女、由紀恵。父親は、女、女の大の女好き、母親も先妻を追い出し父親と結婚したが、母親も今は父親に捨てられ、別の何番目かの愛人と暮らしている父親。母親はすっかり病気になり、美しさは今は見る影もない。大学で知り合った、新之助という男に振り回されながら、男と同棲し始める。だがその男と別れる原因は由紀恵の浮気にあり、新之助や仲間を巻き込みながら、卒業。それからは？

札幌

札幌から青森までは、特急を利用するしかない。札幌発北斗５１号は何事にも感心などないかの如く動き出すのを待っている。列車の窓には雪が氷になり、ガチガチにへばりついている。今朝、中の島のアパートを出るときは、氷の世界かと思えるほど何もかも凍っていた。外はまだ暗く道路は氷ついていたけど、アパートの部屋は地下鉄の駅そばだから、そんなに辛くはなかった。

札幌駅のホームは冷え込んでいた。寒さのもっと厳しい北からやって来た列車は、雪と氷に包まれ窓ガラスは結露でくもっている。この列車は、氷の世界を少しも気にもしない強い意思を持っているようだ。時間が迫っていた。来るはず。さっと乗り込むと列車のなかは暖かい空気が頬に触れる。白く吐く息をまるで怪獣のように口から吐き出していたのに、列車に乗り込むと、吐く息は全く白くならない。それほどに外気と列車の中の温度が違う。Ｗ３４の指定席に座る。

・・・・これで何回目かしら、青森へ帰るのは。・・・・・・・・

列車が、動き出すと、直ぐに、

「やぁーごめん、ごめん、寝坊しちゃった、焦ったよ、待ち合わせの場所にいないし、列車だぁーと思い、走ったよ。あーなんとか間に合ったよ、ふー。」

全く、この男は、純真と言うか田舎者のおおらかさがある。擦れていない。私より3歳したの同期生。

「おはよう、もうー遅いんだからさー、勝ってに行っちゃうわよー昨日あれほど言ったのに寝坊したんでしょうー」

・・・・あーぁどうしようもない奴。・・・・・・

まだ起きたばかりの顔してる。全然平気な顔して、サッさと席に着く。

「なぁー由紀恵さん、はらへったなー朝めし食べたー?」

・・・・この餓鬼ー朝飯だってー私も食べてないのよねー。・・・・・・

でも。

「おにぎりなら有るけど食べるー」何故か用意していた。　別にこの男の為ではない。

「食べる、食わして、助かるー。」私が鞄から取りだしたオニギリの袋を勝ってに開けて、

「いただきます。」と言って、食べ始める。

・・・・そんなにがっつかないでよ。・・・・・・

まぁーいつもの事、気にすれば疲れるだけ。
「ほら、こぼさないの。」
この男の名前は、高森新之助。１９歳になったばかり。新之助って名前聞いた時は、
「新之助」って聞き返してしまった。その時のムッとした顔は今でも忘れない。大きな目が見開いて私を見て、
「可笑しいか？」と聞いたので、私は否定するつもりだったが、
「可笑しいわ！」と言ってしまった。不味いとは思わなかった。その場は何となく負けたくなかったような気がする。怒るかと思ったら、笑いだした。それ以来、大学ではなにかと一緒にいる事が多い。
おにぎりを2個食べたら、今度は飲み物の催促。もって来た缶コーヒーを旨そうに飲むと、
「由紀恵さん、ごちそうさま、少し寝る。」と言って勝ってに寝てしまった。

・・・・なんて奴。・・・・・

この一年、振り回されたような気がする。その間特急列車は札幌から函館目指して急速に離れて行く。窓外は白一色。当たり前だから感傷なんてない。私の冬の帰省はこれで三回目。実家に帰っても、家族の団欒なんかないし、母親しかいない。弟は東京の大学へ行ったきり、一度も帰っていないらしい。父は相変わらず女、女。母は二度目の妻。
私が今年改めて入学したのは、北海道Ａ大学文学部。同じ専攻の教室に目の前で寝ている普通とは少し異なる生意気な男がいた。今流行の男とは少し違うというか、田舎者なのか、小さな事に拘らないというか、やはり変な奴。いつもこの一年行動を共にしていた気がする。私は前の大学を2年で辞めた。辞めた原因はあまりに幼稚すぎる女子大であり、男と化粧にしか興味ない女子学生、お金持ち

のお嬢様達の集団に、付き合いきれなかったからが理由。

　でも本当の理由はわかっている。何の屈託もないお金持ちのお嬢様達の学生生活、私は無理する事に疲れ一刻も早く逃げ出したかったのである。そして逃げ出したのである。

逃げ出した事に後悔なんかないけど、お家がお金持ちなら、家族が円満だったら辞めなくても良かったかもと、どこかで思う私が今でもいる。でも、この一年は楽しかった。高校も女子高、大学も女子大、周りは全て女ばかりだし、カトリック系だから、先生、教授も女ばかり。男に興味ないなんて嘘。有りすぎるのは当然だわ。それが今は男だらけの教室にいて、男とのかかわりかたを充分に勉強させてもらった一年だけど、この新之助だけは、勝手が違う。ずけずけと入ってくる心に。何でだかわからない。私も眠くなってきた。

「おい、由紀恵さん、起きろ、起きろー」声がした。あ～眠ったみたい私。

「なに？」

・・・う～ん、座席の通路に誰か立っている。うぅ～ん誰？見たことが有るみたい。　・・・・

「先輩、由紀恵先輩、紀子です、藤咲　紀子です。」

「あっ、のんちゃん、えー？の、のんちゃん？」青森市内にある女子高の後輩。

「はい！由紀恵さんがこの列車に乗るの見たんです。それでどこの車両に乗ってるかなーと、探してきたんです」

「あっ、のんちゃん、この人、新之助君！」新之助が目は大きく見開いている。分かりやすい男。

立ち上がると

「た、たか、高森です高森新之助です。」

「藤咲　紀子です。」
「なに、緊張してんのさぁ座って。」と新之助の隣に座らせる。まったく二人はお似合いだわ。
・・・・はははっはーお似合いね。・・・・
のんちゃんとは高校時代の英語サークルの、先輩後輩。相変わらず可愛いわ。それにしても、
・・・・なによそゆきの顔してるのよ、新之助君。ははは―、初めて見るわーひどく緊張した顔。ふーん、するんだー、新之助も。固まってしまっている。・・・・・・・
「由紀恵さん、一緒に帰りましょう。荷物心配だから、もう行きます。もうすぐ長万部だから、なにかお飲み物、そう、ジュースでも、買いましょう。」
「のんちゃん、一人なの、だったら長万部過ぎたら、こっち来ない？」
「はい、でも、」
「いいの、新之助君の事は気にしないの。長万部で席に誰も座らなかったら、迎えに行くからさ！」
「はい、じゃそうします。」と言うと、席を離れて行った。目の前の新之助は、普段でも目が大きいのに、いつも以上に目が大きく見開いている。
「なにぼぅっーとしてるの！」
「可愛い、可愛い過ぎる、紹介して。ねっ！ねっ！」
「由紀恵さんの後輩なの、いゃー、いるんだぁー、俺の好みだぁーど、何処の大学なの、教しえてよ、早くっ！」
・・・・こいつ、良くもぬけぬけと、・・・・・・

いつもそう。今年の春の新入生コンパで、同じ青森県出身という事で、何となく親しくなったのは良いけど、同じ教室の瑞穂に一目惚れし、その橋渡しを無理矢理頼まれてしまった。自分で行けば良いのに、拝み倒され、仕方無く、新之助の思いを伝えたら、瑞穂にあっさり、断られてしまった。その時の顔は、思い出すたび笑ってしまう。ひどく歪んだ顔して泣いた。普通、泣かないよ、女の子の前でさ。暫く落ち込んでいたけど、今度は、一恵さんが良いと言い出した。何とか、きっかけを作ってくれと、泣きつかれ、又しても懲りずに、一恵さんとの間を取り持ったけど、やっぱり、駄目だった。それが、今年の6月の中頃。当然の結果。

「なんで自分で行かないのよ？」
「俺は、恥ずかしがりだからさ、それに田舎者だし。」
「田舎者って、あのねー札幌はね、田舎者の集まりなの、何気にしてんの、新之助君らしくないよ！」それ以来学業に専念するとか言ってたけど、夏休みに入る前に、草薙　和枝さん、同じ学部の女の子で話した事のない、と、交際していると報告された。
「なにしに大学入ったの、新之助君は？」
「嫁探しさ。」良くいうわ。そんな和枝さんとも、夏休みが終わって、新之助に会ってみると、
「振られちゃたよ。俺！」と報告された。どこか欠陥有るんだわこの子。それからは、大人しくしていたみたい。

「なぁー由紀恵さん、確か今日さー、函館に用事あるんだよなー、確か友達と会うとかって言ってなかった？」
「はぁ～？なにそれ？ふぅ～ん、新之助君、あんた、私を函館で降ろして、のんちゃんと二人きりになるつもりでしょ。」
「　い、いや、そんな積もりじゃないけど、函館に友達がいるとか、

あー、い、いないとかーな、なんか聞いたようなーえ～。」
「ねぇー新之助君、函館で降りても良いけどさー、のんちゃんには彼氏いるよ。あんな可愛　　く綺麗な女の子だもの、知ってた？大学のパンフレットに、のんちゃん載ってるの？皆さん狙ってるよー彼女はアイドルなのよ。」
「パンフレットは知らない、アイドルなのは分かる、あんなに可愛く綺麗だから、う～ん彼氏がいるのも分かる。分かるけど、俺一目惚れした。」良く言うわ、いつも一目惚れしてんだから。
「止めなさい、無理よ、それでも、私を函館で降ろして、連絡船で口説く？」
「する。断固する。こんなチャンスはない。此は天がくれた、我が人生最大のチャンスだ、これぞ好機、神様に感謝だ。３時間５０分も二人でいられる。ねぇ～由紀恵さん、頼みます。お願い致します、函館で降りて下さい。助けて下さい。」
「全く、なにが、天がくれた人生最大のチャンスよ。勝手な奴。知らないよ、振られるに決まってるのにさ、」
「ありがとう、由紀恵ねーさんにはいっつも迷惑かけます。」

・・・・・・殊勝に頭下げてるは、この子、全く懲りないんだから。私はなんなの？用事ない函館で、どうすんのよ。・・・・・・・

「あれー由紀恵先輩、一緒じゃないんですか～。」不思議そうな表情をして俺を見る。その、今にもこぼれ落ちそうな純粋な大きな瞳、なんて綺麗、可愛いんだ。参った。その長い髪に隠れ現れる寒さに耐えている、少し赤く白く輝く顔、そして、白い息が薄暗い通路の冷たいコンクリートに向かって吐き出している、彼女。可愛い。可愛すぎる。薄いピンク色のダッフルコートは上半身とミニスカートを隠しているけど、長く細目の脚には白いブーツ似合っている。有り得ない、有り得ない瞬間。奇跡が今、具現した。おーまい、仏様！短めの白い襟巻き。函館駅の寒く冷たいコンクリートに立ってい

る彼女は余りに、可愛い過ぎる。今までの女は夢、幻、間違い、あってはならない、消し去る過去。忘れた。忘れた。忘れた。
「いやー函館に友達がいるらしく、なんか、会う約束していたみたいだよ、由紀恵さん。俺　　達、二人で先に行ってって！約束してたんだから、仕方がないよ、」
「そうなんですか？一緒に帰りたかったなー」
「降りちゃったからさー由紀恵さん、かってなんだからさー、一緒に、青森目指して、この連絡船て帰りましょ。由紀恵さん、来ないから。」
「そうなんですか、そうですよねー、この連絡船で帰るしかないですから、行きましょう。　　由紀恵さん、降りたんですかー」

・・・やったー、二人きりだぜー口説く、絶対口説く、チャンスだ・・・・

「空いてますねー、」連絡線は空いているらしい。
「ここに、座りましょう。」

この座席だけのフロアーには、殆んどお客はいない。珍しい事も有るんだ。ほんとに、珍しい。こんな千載一遇のチャンスはない。いつも一人で帰る時は、ジュウタンを敷き詰めている、雑魚寝のフロアーに居ることにしている。6～8人が横になれるスペースが4区画ある。寝るにはフロアーは、硬すぎるが人は人なか、寂しく寝るには、やはり、周りに、誰かいたほうが、安心できる。いつもはそうする。しかし、今は、誰もいない椅子席、それも、なんと、二人きり。これで口説けなければ男じゃ無い。なんていって口説くか、それが、問題だ。

駅

・・・・・函館、１００万$の夜景の街か～。・・・・・きっと冬の夜景も良いかもね～？・・・・・

まだ見たことは無いけど、でも、やはり、今は冬、寒い冬の真ん中、どうしようもない真冬の函館駅構内。函館も雪、雪。吐く息は相変わらず途切れる事なく真っ白。雪と氷、氷の函館駅は北海道の出口そして本州からの入り口。

特急列車から、降りた乗客の皆さん、連絡船目指して重そうな荷物と共に、黙々と歩いて行く。本当はその中に私もいたはず。見ていることに凄く、孤独感を感じる。

・・・・私だけが置いてきぼりされたみたい。・・・全く、私は、大馬鹿だわ、はぁ～、なんて人が善いんだろう。・・・・・・・・・

新之助の奴に、この1年、結局、最後の最後まで振り回され、最後の最後にまるでゴミのように捨てられた、そんな気がする。別に付き合っているわけじゃ無いけど、何だか、捨てられたような気がする。そう思うと急に、寒さが凍みてきた。

・・・函館発１５時、青森着１６時　５５分かー・・・・、３時間近く時間があるわ、どうしようかなーどこに行こうかな～う～ん、しょうがない、こうなれば先ずは腹ごしらえだわ。どっかで、お昼ご飯食べて、時間を潰すしかないわ。・・・・・・・・

駅構内改札口を目指して歩き、改札口を抜けて、ラーメン屋さんの暖簾が直ぐに目に飛び込んで来た。迷う事なく、決めた。冷えた心と身体は温めるに限る。味噌ラーメンに限る。
所々破れて煤けた暖簾にあった風の古びた佇まいのラーメン屋の、４段に区切られたすり硝子の引き戸を開けて、店内に入った途端に、眼鏡が曇りだすほど店内は暖かい。外気温と店内の温度との差は歴然している。暖かさが頬を撫でる。すると、

「おっ、由紀恵、由紀恵さんじゃないか！なんでいるんだー？」
「あれ～須川君、須川君じゃない、アンタこそなんでいるのよ？」
同じ教室の同窓生。同じ歳のはず。この一年あまり、接する機会はなかったけど、周りの学生よりは二年先輩の同期生で私と同じはず。私は青森市で、彼はむつ市の近くの、確か、大間だったはず。

「まず、座れーここ。空いてるから。」
「いいの？誰かと一緒？」
「一緒なわけ無いだろ。座れ！」
「じゃ、遠慮なく。」
「おー座れー、ここの味噌ラーメンうめ～よ。」
「そう、じゃ、私も、頼むはんでさ！」
「おっ、青森近くなると、津軽弁出るなー」
「津軽弁はねー隠しても出るの、仕方が無いわよ！」

津軽弁、青森で育った私にも、分からない言葉。青森市内でも、近在、隣町でも分からない、話し言葉、言い回しが在る。ましてや、津軽半島や板柳、五所川原、弘前等、地域地域によっては、通訳を介さないと分からない場合が在る。奥の深い言葉で有る。

「須川君だって、大間なんだからさ、たまに出るでしょう。」
「意外にさ、陸奥の方言、大間辺りの方言は津軽の言葉と南部の言

葉とが混ざっているんだよ。」
「大間には行った事はないわ、まだ、・・確か須川君、大間だったよね？」
「うんだぁ～大間の須川っていやー俺んとこ一軒だけだから、すぐ分かるー、須川屋って雑貨屋やってんだー、そうだ、今度、遊びに来ればいいさ、なんも無いけど、歓迎するよ。」

・・・・いきなり、遊びに来ればって言われても、行くだけでも大変だわ。・・・・・・

冬の陸奥半島、大間岬、津軽半島に大雪をもたらす大寒気団が津軽海峡を越えて下北半島に、その残り雪と寒さをもたらす、陸の孤島。凄まじい風の通り道。冬の本州の涯、その先は鉛色の冷たい海。そんなイメージだけ浮かぶ。私の青森市もたいして変わらないけど。帰っても暖かい家庭が待っているわけでも無いけど、それでも、帰る、私はなに？

「須川君、どうして函館にいるの？なんか用事あったー？」
「下北まで船で帰るかそれとも、・・うん、決めた、連絡船で帰る。由紀恵さん次の連絡船で帰るんだろ？」
「帰るわ、さっき迄、新之助君と一緒だったんだけどさ、彼に置いてきぼりされちゃったの。」
「さぁー食べながら、話そう。新之助、あいつは一人で帰ったのか？」
「さっき知り合った、私の後輩の女の子と今の連絡船で行ったの、口説き落とすんだって。」
「なんだ、あいつは全然、懲りないなー、何しに大学に来てんだかなー」
「嫁探し、嫁探しだって言ってたわ。」
「嫁探しってかー？呆れた奴だけど、あいつはあれでいて頭良いか

らなー、後期試験、クラス1、2番だからなー」
「そうなのー？泣くし、勝手だし、すぐ寝るし、人の心にづけづけ無断で入るし、わがままだし、え～と？」
「はっはっはっー、由紀恵さん、面白いなー大分あいつは由紀恵さんを振り回したみたいだなーはっはっはっー！」
　ほんとに、この一年振り回されたわ。新之助の顔が浮かぶ。今頃、連絡船の中で、ノンちゃんを口説いているのかしら。無理に決まってる。絶対に無理。確か、彼女には付き合っている男の人がいたはず。図書館で仲良く二人でいるとこ見たのは少し前。代替あんな可愛くきれいな女の子は、周りでほっとかない。

・・・・羨ましいの？いつも可愛いノンちゃんに嫉妬してるの？・・・・そんなこと無い、私は私。・・・

「食べろよ、のびちゃうぜ。」食べ終わった須川君が、こっちを見ながら言う。
「うん、食べる。食べるわ。伸びちゃうものね。」私は、店の温度で、急に熱くなった頬に手の平を当てながら、食べ始めた。みそラーメンのスープの熱さが、口の中で暴れだす。にんにくがかなり効いている。立ち込める湯気を優しく、愛しく感じるなんてことは、北国の人間じゃなければ本当のところは、たぶん分からないだろう。

「由起恵さん、一緒に帰ろうぜ、俺も連絡船で青森まで行くよ、」
「えー良いの、なんかさー、小型船で帰るんじゃなかったの？」スープが美味い。
「由起恵さんと一緒なんて、なかなか無いからさー、もう少し話がしたいなー。だから青森で一杯やろう、久々の青森だしさー、お前さん、暇、あるかい？」

・・・・・口説いているのかしら？・・・・・・

「別にこれといった用事は無いけどさ、なんかさー、急じゃない？」
「急かー？いやー、嫌なら良いんだけどさ。」
「別に嫌じゃないけど、泊まるとこ、どうすんのさ？」
「泊って行く。お前さんのとこ。」そんな事を平気な顔をして言う。
「えー？無理、絶対ダメー、ダメよ。泊まるとこ無いし、母が、」
「はははははー冗談だよ。そんなに真面目に言うこともないだろに。面白い女だなー全く、」
「失礼ねー、面白い女なんて、」
「怒るなよ、素直にそう思ったんだから。」
「良く、そう言う事、平気で言えるわねー、新之助と同類だわ。」
また新之助の顔が浮かんだ。

・・・・ふられろ、ふられろ、ふ、ら、れ、ろー・・・・・・・何考えているの、。あんたは！・・・・

「ほう、新之助の奴と似ているのか？俺？」
「似てないわよー、新之助君の方が、男前だわ。若いしさ、」
「しかし良く平気で、俺の顔の事を言うなー、傷つくなー。」
「えっ？そんなナイーブなの？見えないわよ、」
「おい、おい、全くもう、どうすんのさ？まっもう顔の事はいいよ。青森の従兄んとこに泊めてもらうよ。時間は有るのかー？」
「そうねー、私も帰っても、用事ないしー、飲もっかー。」
「おし、決まりだー、じゃ、次の連絡船で帰ろう、今日は飲むぞー」

夕方の函館港を連絡船は出て行く。見渡す港はの風景は雪一面、白と灰色の世界。海の色は相変わらず、鉛色で冷たく嫌な色をしている。雪も降っている。兎に角寒い。

「なー由起恵さん、今日は、青森で一緒に飯食おう、どっか美味し

い店案内してよ。」
「美味しい店かどうか知らないけど、何がいいの？和食、それとも、洋食？」
「俺は、和食がいいな、あっ、俺の従兄は三内だから、新町通りがいいよ。」
「須川君良く知ってるー！青森良く来るの？」
「たまにだよ、買い物少ししたことがあるんだ。知ってるのは、新町通りだけだよ。」
「分かったわ、じゃ、一緒に飲もうか、お店は、私の知ってるとこで良いでしょ。」
「知ってる店があればそこで良いよ。」

船は津軽海峡を青森に向かって、静かに、冬の海にかかわらず、静かに進んでいる。
窓の、ちっさな丸い窓、向こうは、真っ暗で何も見えない。乗るたび、連絡船の沈没事故が浮かぶ。今、沈めば、間違いなく死ぬ。そう思って乗る、連絡船。でも今日は、静かだ。
津軽海峡のちょうど中間点辺りは、波も荒くなる。一応、公海になる津軽海峡の中間点。
ソビエト、通称、ソ連の軍艦が、通過して行ける、不思議なエリア。

連絡船は、少し揺れ出してきた。テーブルのビール壜が横に走るほどではない。いつものことである。湾外に近づくにつれて、波が高くなるのはいつものこと。私は、船酔いはしない。
食堂で、須川君とビールを飲んでいる。須川君は、青森県人だからかなーお酒は強そう。
大学では、あまり話したことはないから、どんな性格の男の人なのか、今一、分からなかった。ただ同じ青森県出身と言うことで、なんとなく話す事はあった。私と同い年だし。
「新之助の奴は、先に帰って、その彼女と、上手くいったんだべか

なー、あいつは、あれで意外と、良い男だからなーもてるんだろ？」
「須川君と違って？」
「だから、俺の顔の事は言うなって、」
「ごめん、上手くいくわけないわよ、新之助の奴、またふられるよ。だってさ、彼女、付き合ってるもん。」
「なんだーそれじゃ、だめだなー新之助今度もまたふられるかーはははははー」
須川君って、意外と面白いかも。でも、分かんない。
「今日は、青森についたら、どうするの？」
「ホテルにでも泊まるよ、親戚のとこってもなー、それに、夜も遅いしさ、一緒に飲もう、」
「駅の近くに泊まるとこあるから、新町で飲みましょう。家に帰っても遅いしさ、」
「そうだな、ところで、何で今の大学来たの？せっかく入った女子大、やめてさ、・・・」
「須川君だってそうでしょ、せっかく入った、国立大やめてさ。」
「やめるべ、今日はさ。」

連絡船は津軽海峡を、そんなに揺れずに進んでる。外は既に暗い。あと少しで、青森に着く。新之助達は、とっくに着いた頃かしら？口説けるわけがないわよ、だって、ノンちゃんには、付き合ってる彼氏がいるもの、私、見たもの。

「青森雪が多いんだべ、一番降るからなー、なー、由紀恵さんよ、俺と付き合ってみないか？」
「えっ？」
「な、なによ、急に、」
「いやさ、最初に大学に入ってきて初めてみた時から、良い女だなーと、思ってた。機会があれば、いつか言おうと思ってたら、この年末に同じラーメン屋で会うなんて、何かの縁だと思ってよ、今言

うことにした。」と、言いながら、ビールをグイと飲み込んだ。
「何言ってんのよ、今、言う？」
「何？今言ってはダメなのか？」顔が赤い。
「いきなりジャン、そう言うのって、・・・・・・こんなとこでさ？」
「じゃ、どこで言えば良いんだよ？」
「何よ、その言い方！、まるで付き合うのが当たりみたいに威張ってる！」
「い、いや、それはだなー、・・・・恥ずかしいだろ」
「ふ～ん須川君でも、照れるんだ？」
「おい！」
面白い奴。青森県の男がここにいる。
「人見しりをする、恥ずかしがり屋、奥手だし、無口だし」、それでいて、威張りたがるし、ほんとに田舎者だわ。でも、青森に帰ると、それが当たり前。

実を言うと、私には付き合っている彼氏がいる。でも、恋人かと問われると、そうでもないし。成り行きで、そうなったところがあるし。まー、「愛人」って言われれば、否定はできない。抱かれたのは、今も付き合ってるのは先生、前の学校の教授。子供の保育のアルバイトに行ってから４回目の金曜日の夕方だった。教授は、４８歳の渋い感じがするダンディーで、女学生達に、人気があった。奥様は若く綺麗な女性で、中学校の先生、ご夫婦共働き。
ＳＥＸは、初めてだったから、少しショックを受けた。処女が簡単に奪われた。あまりに簡単だった。そんな気がする。男の性に対する憧れが有った分、簡単に、成り行きで、抱かれた。
後悔はしなかったけど、「抱かれた後」に、直ぐに奥様と顔を合わせた時には、罪悪感が広がり、逃げるように、教授の家から出て言った事を今でも覚えている。
それは、去年の春。今でも、一月に、２－３回は抱かれている。Ｓ

ＥＸに溺れるというほどではない。落ち着いた、ＳＥＸだからかなー？

「その返事少し待ってもらっていい？」
「いや、今欲しい、・・」
「どうして？」
「どうしてもさ、俺って、面倒くさいの嫌なんだよ、」
「それが、女を口説く文句なのー？全く、呆れた人ねー」
「駄目なら、ダメで良いよ、」
「だから、少し待ってって言ってんの！」
「いつまで、待つのよ？」
「どうして、そうなの？そんなんじゃ、嫌われるよ？」
「照れるんだよ！」また、ビールを飲み干す。私は、おかしな男だわと思いながら、ビールをついでやる。
「じゃ、青森についてから言うわ、」
「そうか、じゃ待つ！」威張ってる。おかしなやつ。

・・・・・ふ～ん、私と、付き合いたいって言うんだ、須川君！・・・・・

教授の顔が浮かんだ。彼を、好きだとか嫌いだとかの感情は、なんとなく持てない。持てないけど、なぜか、抱かれている。私だけのものにしたいとも、思わない。多分、子供を見たからだろうとは思っている。

・・・・可愛い。・・・・・・・

「あの無邪気な笑顔」を見ていると、君たちの、「お父さんに抱かれてるんだぞー」って、叫んでみたくなる時がある。でも、言えないし、言わない。当たり前だわ、奥様だって気がついてるかもし

れない。でも、優しく接してくれる。そろそろ、「潮どき」、かも。そう思いながらも、教授にセックスをするために、呼ばれると、呼び出されたホテルまで、黙って行ってしまう、そして、抱かれる。もう、処女を失ってから、随分日時が立つ。でも、教授に対しては、愛情、死ぬほど好きだって感情もないみたい。だから、教授にとっては「都合が良い女」かもしれない。でも、今は、なんとなく、居心地がいい。セックスも嫌いじゃない・・・・

あんなに憧れた、「男、男性との交際」が、今は、世間で言う、不倫、愛人になっている自分に呆れもする。そうなる前に、普通の恋愛がしたかったと思う自分もどこかに居る。でも、そんな男性は、周りには、いなかったし、出来なかった。

不倫って言葉は、好きじゃなかった。なぜなら、父親と、同じ事をしている自分がいる。同じ事をしている。それで母が捨てられた状態になっているのに、自分も同じ事をしている、好きではなかったけど、それでも、やはり、自分は自分だし、嫌いになるわけにもいかない。

「どうした？急に黙り込んで？」
「うっ～うん、ちょっと、思い出してたの！」
「何をさ。？」
「いいよー、須川君には関係ないことよ。」
「何だー冷たいなー、やっぱり俺の事は嫌いかー？」
「そんなんじゃないよー。」
「私にも、ビール、頂戴！」
「あー飲めよ、さー」

須川君かー？青森の田舎者の匂いがする。ちっとも洗練なんかされていないけど、立ち込める匂いと言うか、雰囲気が何故か落ち着く。でも、頑固な、意固地な感じがする。

「ほー結構いけるんだなー？？」
「やっと、飲めるようになったんだー。札幌来てから覚えたの。」

「まー、皆、そうさ、俺も、こっちで覚えたからなー、初めてのコンパで、しこたま飲まされてさー、酔っ払ってしまってさ、赤ちょうちんの屋台の前で、地面に寝転がってさ～げーげー吐きながら、地面に寝た事あるかい？」

・・・・デリカシーって言葉知らないのね。・・・・・

「ないわよ、そんなに飲まないもの！」

「いやー地面って、冷たいんだよ、身体の奥底から、冷えてくるんだ。」

「良い経験したでしょ、馬鹿ねー。」

「んだ、もうあんな飲み方はしないよ、幸恵さん、処女か？」

「んっ？？ぅうん？？な、なによー、失礼ね、い、いきなり、そんな事聞くの？新之助と同じじゃない、失礼しちゃうわ、」

・・・・・ドキリとした。こんな事をいきなり聞くなんて。・・・・・

「処女か？・・・・・」真面目な顔で聞く。

・・・・・また聞いて来た。・・・・・むっと、してきた。・・・・・

「聞いてどうすんのよ？」少し、声が、怒っている。

「処女か？」

「違う・・・・じゃないよ、・・・・・・・満足？？」つい、言った。言ってしまった。

「・・・そうかー、・・・・・いやそれで良い。なー、俺と付きあえよ、付き合え、なっ！！」と、強く言われた。

「あのー、それって、口説いてるの、私を？・・・それで？・・・そんな事をいきなり聞いてさ！！」

「あー、そうだ、そうだよ、俺の女にする。それとも、誰か付き合

っている男がいるのか？」

・・・俺の女・・・・・・何それ？？・・・・・

・・・全く、なんて奴。そんな、事を平気で言い、聞くなんて。田舎者だわ。なんて奴。・・・・

「いるわよ。いたらどうすんのよ。？？」少し、アルコールが、聞いているみたい。

「な、なんだーいるのかー？？なんだー。」そう言いながら、全然ガッカリしてない。

「い、いないわよ。須川君がいきなりそんな事を聞くからさ、デリカシーも何もあったもんじゃないでしょ、」

「いや、わりい、わりい、付き合うなら、最初から知ってた方がいいと思ってよ。」

「は～ん？なんて人なのよ。止めるはよ、さっきまで、付き合っても良いかなーと思っていたんだけど、止める。いや、いいわ、止めます。」

「よし、決まりだ、俺と付き合え。さー飲めよ、さー」そういうと、ビールをグラスに注いだ。私は、黙って飲み干した。すっかり、ペースに乗せられた見たい。

「付き合ってる彼氏がいたらどうするつもりだったの？・・・・諦めるの？」

「諦めるなんて事はしないさ。彼氏がいるのが普通だから、無理やり奪う。そのつもりだ。」

「・・・・・・・・・・・・」どっか、違うような気がしてる。

・・・・。こんな奴知らないわ。・・・・・・

「俺と付き合え、なっ！！」

「しかしねー、どうしてそう強引なの？それで女を口説いてるつもりなの？」
「なんだよ、これが、今の俺の精一杯の気持なんだぞ、心臓がさっきから悲鳴を、あげてんだぞー。」
「何が、悲鳴よ、どうして、青森の男ってそうなんだろ、それじゃ、口説けるわけないわよ、全く、新之助と、似てるんだから、」
「おっ、そうか、新之助と似てるか？はははははーそうかー似てるかー」
「ホント、似てるよ、直ぐ怒るし、強引だし、自分勝手だし、女の気持なんて何にも考えてないもの、・・」
「なんだ、新之助に惚れてんのか？」
「馬鹿な事は言わないの、あの子、なんかさー、田舎者で純粋でさー、なんかさー、気になるんだー」そう言うと、ビール壜を持って、注いでいた。
「まー随分一緒にいたからなー、皆、付き合ってるんだと、思ってたんじゃねーのかなー」
「飲めよー、ほら、」ビールを注ぎながら、私を見る目が柔らかい。
「もうー、良いわ、それより、青森着いたら、泊まるとこ、どこにするの？外は、すっかり暗いし、寒いし、・・・」
「ほら、駅前に、ビジネスホテルか、なんかあるべさ、一緒に泊まるか？」
「何言ってんのよ、いやらしい。・・」
「まー、まー、怒るなって、でもさ、俺、青森市内分からないから、案内くらいしてくれよな。」
「駅前に、泊るとこならあるわよ。」
「そうかー、じゃそこにしよう、一緒に泊れよ、」
「な、何馬鹿なこと言ってんのよ、もうー」全く、こんな男っているー？デリカシーのかけらもないし、強引だし、
・・・・・・どうしようかしら？？・・・・・・・

「そろそろ、青森も近いんだろう、席移るべや、」
「そうね、少し酔ったみたい、」連絡船は珍しいくらいに揺れなかった。いつもは、かなり揺れるのに。

青森港・・・・・・・雪の青森、また帰って来た。

連絡船から外に出ると、青森の空気が、慣れ親しんだ、冷えた冬の空気が肺に流れ込んできた。北海道のひりひりする冷たい空気とは少し違う、どこか少し暖かい。連絡船から下りて、冷え切った長い通路を歩いて青森駅構内へ入っていく。青森発の特急列車が、出発を待っている。連絡船の乗客が、急いで駅弁や飲み物を忙しく買っている。私は、その列車で行く事はない。ここが、この青森が、私の終点、生まれ故郷。現在は、真冬の季節。珍しく、雪が少ない。

「ねー須川君、駅前の、ビジネスホテルで良いかなー？」
「あー良いよ、なるべく駅に近い場所がいいよ、」
「そうね、・・・」出口付近では、人の流れが多い。

・・・・・やっと、帰ってきたわ。・・・・・・・・・

駅の正面出口から見る、青森。懐かしい、新町通りが見える。ドアーを開けると、冷たい冷気が、身体を包む。でも、何故か、心地良い。慣れ親しんだ、青森の冬。

帰ってきたと云っても、誰も迎えに来ているわけでもない。小雪が待っている、師走の青森駅前。久し振りの新町通り。一瞬高校時代の思い出が頭をよぎる。相変わらず、道路の真ん中に水が流れている。水といっても、真水ではない。海水。融雪の為の設備。そのくらい、豪雪地域。でも、嬉しい。やはり、故郷なんだわ。

「いやー、青森は、都会だなー。」
「どこがさ、なんもここだっキャ、都会でねおん、」
「ははははー青森に着いたらいきなり、津軽弁か、良いぞーもっと、言ってくれ。」
「ふん、なによ、良いわよ、ここは、青森だはんで、普通に出るわよ、」
「ははははーなして、そんなに顔を膨らましてんだよー、折角のおなごが、台無しだぞー、ははははは、面白いおなごだー」

外に出ると、寒さが浸みる。白い息を吐きながら、二人で駅を後にして、目の前に続いている新町通りのアーケードに入った途端に、須川君が、笑いながら言ったものだから、
「もうー失礼な、奴、もう、駄目、さっきまで、付き合っても良いかなーと、思ってたけど、止めるわ、」
「まーまー、俺くらい優しい男はいないんだぞ、その話は、飲みながら、な、」
「ふん、どうして、そんなに自信過剰なのかしら、」
「当然の、当たり前の事実だからだよ、結構寒いなー、ホテルはまだ遠いのか？う～さぶ～～」
「もう少し、先にあるわよ、」流石に人通りは少ないけど、お正月の準備は済んでいる。
久しぶりに歩く新町通り。今年も、帰って来た。

青森市内

「はい、乾杯、やっと、落ち着くなー、あのビジネスホテル、結構良いなー」
「ほら、飲めよ、熱燗、」

「うん、青森に来たら、冬の定番は、じゃっぱ汁よ、」
「あ～それで、良いよ、腹も減ったし、」
「ほんと、呆れるくらい、どうして、デリカシーがないのよ、全く、そんなんで、女の子にもてると思ってんのー？」
「何がデリカシーだよ、もうこうやって、付き合ってるべよ、」
「な、何言ってんの？まだ付き合うって決めたわけじゃないわよ、」
にやにやしている。全く、なんて奴。
「おい、注いでくれよ、」と言って、目の前に杯をつき出した。その仕草が、いかにもって気がしたから、
「自分で、注いで、」
「良いから、注いでくれよ、今日初めてなんだからさー」と言いながら、じっと、私を見る。
「仕方がないわねー、ほら、」杯に、熱燗を注ぐ。
「おーありがとう、これで決まりだ、堅めの杯だ。ほら、由起恵さんもほら、」
私の杯に、熱燗を注ぐ。何故かしら、それを、黙って見ていた。なんか、ペースに乗せられていく。
「じゃ、乾杯ー！！」
「うん、かんぱい・・・・」
「よし、俺と付き合え、なっ！！！」と、私に強い視線を向けながら、また、言った。
「そうねー、なんか急なような気がするわ。今日会ったばかりよ、」
「連絡船で、充分話したぞ、ほら、飲め、」私は結構お酒は強い。何だか、まだ船に乗っているような気がする。ふわ～と、した気分でいる。
・・・・・・どうしようかなー？？？・・・・・・・・・・成り行きで、・・・・・・
「なっ、付き合えよ、うんと言えよ、」

「全く、強引なのねー」先生の顔が浮かんだ。でも、直ぐに消し去った。

・・・・・もう、潮時かもしれない・・・・・・・・・・・・

「な、どうした？やっぱり駄目か？？」

「そんなこと言って無いでしょ、しかしねー急に言われてもねー、」

「ばか、こんな事は急なんだよ、いつまでも女の腐ったようにいじいじしたって、疲れるだけだ、ダメなら駄目で、しょうがないべや、・・」声が、少し上ずっている。

「全く、それが、女に言う言葉なの？？優しくもなんともないよ、それじゃ、今まで、女の人と付き合ったこと無いでしょ、」

「あ、あるよ、でも別れた、」

「なんで？なんで別れたの？捨てられたんでしょ、」

「あ、あほ言え！！、俺が、捨てたんだよ、」

「ふ～ん、嘘だね～、やっぱり捨てられたんでしょ、分かるわー」

「いや、俺から、別れたんだ、」顔が赤い。お酒のせいではないのがなんとなくわかる。

「まー良いわよ、」

「なんだよ、で、返事はくれないのか？」

「・・・・・・・」私は、別にじらしているわけではなく、なんとなく、直ぐに返事をするがいやなような・・・・・・・

「な、そう何回も言わせるなよ、恥ずかしいべや。」

「良くそういう事を平気で言えるわねー呆れる、・・・・・・良いわよ、」

「うっ？うん～？？今、良いって言ったかー？声が低くて聞こえないよ！！」

「もう、少しは持ってよねー、デリカシーをさー」

「で、どうなんだ？つきあってもいいのか、俺と、なっ、なっ？？？？」

「うん、もう諦めたわ、あまりのしつこさと、強引さに負けました・・・・・・大事にしてくれる??」
「うおーっ、やったー、良いんだな、いやー清水の舞台から降りるつもりで、告白して、良かったー、うわぁー、うん、うんうん、・・・・」

・・・・全く、こんなに喜びを素直に表すなんて、変な奴・・・・・・・・・

「だ、大事にする。もちろんだ。」真面目な顔で言う。

・・・・教授の事を言おうかしら?・・・・
・・・・・・でも、やっぱり、止めよう、・・・・・・言っても仕方がないし・・・・傷つけてしまうわ・・・・・・・・・・それに、また、呼ばれたら・・・・・・・・・??

「良し、なー由紀恵さんよ、さー今日は、記念日だ、堅めの杯を受けてくれよ、」と言って、自分の飲んでいた杯を飲み干して、私に差し出した。

・・・・・・えー結婚するわけじゃないのにーするー・・・・・????

「ほら、」
「はい、はい、」私の、杯に、　何回かに分けて、お酒を注いだ。
じゃ、私も、須川君の杯に、何回かに分けて、注いだ。
「うん、俺は、宣言する。大事にする、なっ由紀恵さんよ、約束する。絶対約束する。」
「はい、」何故だか、素直に受け入れた。
「じゃ、乾杯、」
「乾杯、宜しくお願いします。・・・・・・なんか、変だわねー私達、

」
「なんも、変じゃない、これで、俺の女にする事が出来る。いや～～苦節1年、待ったかいがあったと言うもんだ。ははははは～～～」
・・・やっぱり、よそうかしら??私まで、変になりそう。・・・・・・・・
又、教授の顔が浮かんだ。
・・・・・良いの?この男に抱かれるんだわ。良いの～?・・・・・・・・・
直ぐに、こういう事を考えるなんて、私って、相当、好きものかも・・・・・
そんな思いが一瞬、よぎっては直ぐに消えた。私は、須川君の喜んでいる表情を見ている。好きに、なったわけではないけど、好きになれそうな気がしていた。今日、函館であってから、今まで一緒にいて、嫌ではなかった。この素朴さと、青森の男が持つ、匂いが、嫌いではなかった。
・・・・良いわ・・・・・・決めた、・・・・・付き合ってみる。・・・・良いわ。・・・・
「今晩帰るのか?」
「何よ、それ、」
「い、いやー、もう少し一緒にいたいなーと、思ってさ、」
照れながらこちらを見ないでいう。
・・・・・何考えてんのよー?・・・・・・

「何考えてんのよー、いやらしい、」
「な、何も言って無いべやー」
「いいえ、心で言ってる顔してるわよ、」
「うっ、・・うーん、・・なー、由紀恵さんよ～」
「な、なに、」
「た、頼む、今日は、一緒にいてくれ、」拝むように手を合わせて言う。
「いや、」
「た、頼む、」
「いや、変な事するつもりでしょ、」
「い、いや、な、何もしない、何もしないから、は、話を、」
「するもん、だ～め！！」
「し、しないって！！誰も知らない街に一人置いて行くのかー？」
・・・もう、この男は！・・・・・酔わせて、眠らせようか？・・・・・
「まー食べよう、腹が減った。ところで、正月、俺んところにスキーに来ないか？」
「えー！！？下北まで行くの大変だよ、」
「何言ってんだよ、下北のハマナスラインがあるし、電車だってあるー、なっ来いよ、」
・・・・下北かー、寒いし遠いなー・・・・・
「私、スキーやった事がないのよねー」
「大丈夫だって、陸奥湾が見える、釜臥山は、良いぞー、陸奥市に泊ってさ、それとも、俺の家に泊まると言ってもなー結構、遠いしなー・・・」

・・・・・考えてるわ、まだ、行くとも何とも言って無いのにー・・・・・

「スキーも持ってないしさー、遠慮しとくわ。」
「大丈夫だって、スキーは借りればいいし、服は俺のを貸すよ、」
「ダメー、須川君のって男ものでしょ、格好悪いでしょ、」

・・・・買おうかしら、先生からもらった、お金が有るし、・・・・・

教授の顔が浮かんだ。
「いや、まー飲め飲め、ウエアーは心配するなって、それより、是非、下北に来てほしいんだ。お、親に紹介したいんだ、」
「お、親って、何考えてんだか、まだ、付き合うって決めて、何分も経っていないのよ、呆れた人だわ、須川君って！！」

・・・・・・親、いやだー、全然早いわよ・・・・・・・もう、・・・・・あっ、そうだ、今日帰るって電話してたのに、おか～ちゃんに電話しなくちゃ・・・・いやだー忘れてた。・・・・・・

「ねー須川君さ、ちょっと、待ってて、母に電話してくるから、連絡するの、忘れてた。」
「そうした方がいい。すっかり忘れてた。」

「もしもし、おか～ちゃん、？？」
「もしもし、おー由紀恵か、帰って来たのか？」聞き覚えのある声、父だった。

・・・・・珍しい、いつも家にいないくせに。・・・・・・・・・

「うん、今、お友達と一緒に食事してるから、今日は帰らないって、おか～ちゃんに伝えて、おか～ちゃん、いるの？」あまり、父とは、話を、したくはなかった。いつもいないし、母が可哀想、・・・・・・・・・段々いらいらが募ってくる。・・・・・・・・・。

「ごめん、待ったでしょ、」
「どうした？表情が変わったぞ。その綺麗な顔が、なんか怒ってる風だぞ、」

・・・・良く見てる、・・・・・・・・

「良いの、気にしないで、須川君には関係ないし、」
「なんだよ、関係ないって、冷たいなー」
「そういうんじゃないの、ちょっと、父とネ、」
「あ～そうか、済まんすまん、さー食べるべや、このじゃっぱ汁、熱くてうまいぜ」
「うん、」
「おーやっと、素直なおなごになったぞ、」
「もう何いってんのよ、」

父とは、言い争いはしなかったけど、家に居ないものと、決めている人間が、居ると言う事は、他人がいるような、気がしていた。もう、何度目かの愛人かしら、母と連絡しあってる、元愛人もいる。

・・・・全く、良くもまー次々女を変えれるものだわ。・・・・・・・

いつもそう思っていた。母が可哀想で、可哀想で、子供の時から、父が嫌だった。でも、父は、家にいない時が多いに関わらず、生活費を渡さないと云う事は無かったし、たまに帰ってくる父と母は、私達の前で言い争いさえしない、した所を見た事がなかった。どうして父が我が家にいないのか？その事を母に何度か尋ねたが、最後には聞いてはいけない事なのだと、気がつき、それ以来、父の事は、母と話した事はなかった。冷え冷えとした家庭、急に思い出している。

「なんだー??なんかしたのかよ?」
「うぅ～ん??なにもしないわよ、気にしないで、」
「なんだよなー急に深刻そうな顔してよ、」須川君が心配そうな表情をしている。
「大丈夫よ、」
「帰るなんて言うなよなー、な、何にもしないからさ、」
「ふ～ん、そ～う、私、もう帰ろうかなー若い女がさ、男と酒飲んでるとこ誰かに見られたら、なんて言われるか分かんないしー」
「おら、飲めよ、その調子でいいよ、辛そうな顔、似合わないぞ、男にでも振られたのか?」
「もう、この男はさー呆れるよ、私と付き合うんでしょう、何で、そう、デリカシーがないのよ、付き合うの、止めようか?」
「ま、まて、待て、なんぼ気が強いんだべよ、このおなごはさ。」
「悪かったわね、気が強くてさ。」
須川君の何処か、田舎臭さに救われる。純情みたいだし、照れ屋だし、私の知ってる青森の男がいる。
「いいわよ、今日は、もう少しいるから、お腹空いたわ、ご飯貰うよ、済みませんー」

部屋

「おっ、結構ー暖かいぞー、さぁー、椅子に座れ、もう少し話をするべよ、」
「私、帰るわ、帰った方がいいような気がする、須川君、もう寝なさい、」
「ちょ、ちょっと、待った、待った、まだ、帰るなよ、一人置いて行くなよ、寂しいからよ、」
「何言ってんのよ、悪いこと考えてるでしょ・・・・・、私も、馬鹿だわ、男の人と、ホテルの部屋に入るなんて、どうかしてるわ、」
「良いから、そこに座れ、なっ！！」
「駄目、もう帰るは、」そう言って、部屋のドアーに行こうと、振り向くと、後ろから、須川君が動く気配がした。私は、須川君を見ようと、身体の向きを変える前に、須川君にの腕の中に強く抱きしめられていた。
「チヨっ、ちょっと・・・・・す、須川君、」
私は須川君を離そうとしてして、身体の押す場所を反射的に探したが、私の手は、須川君の身体の横しか押せなかった。押すとしても、既に胸が須川君の胸と密着している。少し大きめの乳房に須川君の胸を感じる。
「い、イヤ、・・・」そう言って、動いたが、抱きしめた腕に力を感じて、動きが取れない。
「す、須川君、は、離してー、・・・」ますます力を感じ、強く抱きしめられる。

・・・そのまま、少しの時間が経ったような気がした。・・・・・・・・・・・・・・でもそれは一瞬かもしれない。・・・・・・静かだった。

須川君は、抱きしめたまま、動かない。ただ、じっと、動かず抱きしめている。

微妙な時間が流れた。
叫んで無理やり拒否出来たかもしれないけど、段々と、私の身体の力が抜けてきた。それを、見計らったかのように、身体が少し離れたと、思ったら、顔を両手で押さえられ、そのまま、唇に唇が重なり、唇を強く吸われる。
身体が、動かない、動けない、動く気もしない、そのまま、吸われ続けている。息が苦しくなってきた時に、閉じた唇をこじ開けるように、舌が侵入してきて、私の舌が、絡め取られる。
お互いの舌が絡む。私も、何故だか、舌を動かしている。
「あっ！！！」乳房をいきなり、握られた。
「い、嫌ー、い、痛いわよ、！！」唇を離して、直ぐに声にする。
「おっ、おっ、ご、ごめん、」
「もう、酷いんだから、」私は、興奮気味の須川君を、睨んだ。すると、怯むどころか、再び私を、強く引きつけて、強引に再び、唇を吸う。抱き締める腕に力を感じる。私の抵抗もそこまでだった。私が力を抜くと、押さえつけていた腕の力も抜けて、背中に感じる手が、上と下に動きだす。そして再び、抱きしめられた。唇は吸われ続けている。

・・・・全く、先生とは違う、やり方・・・女に馴れていないわ、分かるわ、・・・・でも、・・・・

「あっ、」乳房を、・・・・・掌で今度は包むように、優しく握って来た。口の中の舌がゆっくりと動き出している。

・・・・く、くすぐったいーわー、・・・・・・

「あっ！！」唇が離れた瞬間、強い力で、私の身体が持ち上げられ、ふわっと浮いた感じがした。目を開けると、横抱きに抱きかかえられている。ホテルの薄いルームライトが揺れて見える。

そのまま、セミダブルのベッドの上に荒あらしく、落とされ、仰向けの私の身体の上に、須川君の身体が、覆い被さってきて、身体を押さえこまれる。
「い、嫌ーす、須川君！！」須川君は何も言わない。
そして、顔を覆い隠している髪を手で、こするように、上に跳ね上げ、開いた私の唇に、須川君の唇が重なる。そのまま、舌が入ってくる、舌が絡め取られ、忙しく絡んでくる。
セーターの上から、掴まれた。そのまま強く乳房が揉まれ始める。
「い、いやー、や、止めて、」仰向けになっても、私の乳房は硬くあまり横に崩れない。
唇を離し、抗議したけど、
「うっ、・・」また、重なった。須川君の手は、乳房を、揉んでいる。

・・・・・だめー、乳房は、感じるの・・・・・・・・・・・

揉まれている乳房の手は、教授の握り方、触り方、揉み方とは、明らかに違う。須川君の手は、荒過ぎる。でも、私の弱点は、乳房なの。須川君が忙しく動き出し始める。でも、唇は吸われ続けている。私もまた、舌の動きに舌を絡ませている。セーターの中に手を感じた時には、ブラジャーの中へ須川君の手が滑り込んでいた。
「あん、い、いやー」握られる。乳首がその手に反応し始める。再び、強く握られる。
「うっうぅ～ん～」鼻から小さな吐息が出る。

・・・・・どうしよ、・・・このままじゃ、・・・・・・

乳房が、須川君の手で直に、荒あらしく揉まれている。セーターが、たくしあげられる。
乳房が、部屋の冷たい空気に触れる。剥きだしの乳房の乳首の、ま

るで子供が吸いつくように、しゃぶりついてきた。
「あっいたっ、痛い～い、」須川君の歯が、強く乳首を齧った。
「ごめん、痛かったかー、済まん、」そう言うと、再び、乳首を舐めはじめる。
乳房を手で揉みながら、口をあちこち動かして、確かめるように、夢中で吸っている。その動きに向き合うようになって、私も感じ始めてる。
「あっ、くすぐった～い、脇の下は駄目ー、止めて～」
「あ～ん、」
今度は、私の両脚の間に身体を置いて、私のおなかの上に上半身を乗せて、両手で、下から上に揉みあげるようにされる。乳房の付け根辺りから、握られ、揉まれているのが分かる。全然、優しくない。
「もう、全然優しくないわよ、もっと、優しくしてよー」
「わ、わりいー、あんまり経験ないんだ、」
「・・・・・・・・優しくして、・・・・・」

・・・・・経験がないのは、分かったわ、先生とは全然違うもの、・・・・やはり先生と比較してしまうわ～～・・・・・・・・・

私の思いとは関係なく、須川君は、夢中で乳房を、揉んでいる。
「もっと、優しく、・・・・・」
「うん、こうか？」力を抜いて、両手で包み込むように、柔らかく握ってくる。
「え～そうよ、初めから強くしちゃダメなの、」
「うん、もう一回やり直しだ、」そう言うと、柔柔と、揉み始める。
「あ～、いいわ、そうよ、女は優しくするのよ、」

・・・・・教えてどうするのよ、良いの・・・ホントに？？・・・・・・

私は、何故か、このまま最後までいく覚悟が、出来初めていた。
それを、察したかのように、
「セーター脱がすぞ、」
「駄目、」そう言ってみた。
無視された。
「だめよー・・・」そう、言ってみたけど、須川君には届かない。
胸の上方に、たくしあげられていたセーターをそのまま、頭から、強引にはぎ取られる。
「い、いや～」
すっかり上半身は裸にさせられた私は、乳房を両腕で隠すようにした。須川君という、初めての男に、見せるのは、やはり抵抗感がある。
「恥ずかしいわ～」手で、ベッドのシーツを手繰り寄せて、胸を隠すと、
「俺も、脱ぐよ、」と、半身を起して、急いで、衣服を脱ぎ始める。
私は、目を閉じて、これから始まる事を、想像していた。

「おはよー、目を覚ませよ、朝飯、食いにいくぞー」
「うん、・・・・・・おはよう、・・・・しちゃったんだー私達、・・・・」
「おう、良かったぞ、なかなか、好い身体してたよ、」
「もう、何よーデリカシイーって無いの??酷い奴、」私は、毛布を頭にかけて、見えないようにした。
「いや、悪い悪い、でも、ホントに良かったよ。」というと、ベッドに上がり、毛布の中に、もぐりこんできて、そのまま、身体を抱きしめ、唇を求められた。そのまま、唇が重なり、舌が絡まる。当然の如くに乳房が、揉まれ始める。

・・・・・・・・まぁ～良いか～・・・・・・・・・しちゃったんだもの・・・・・・・

「ね～須川君、大事にしてくれる??」聞きたくはなかったけど、どうしても言わずにいられなかった。

「おう～う～ん、美味しいよ、このおっぱい、う～んむ、」揉みながら、むしゃぶり、吸い始めた。

・・・・・感じるわ～、う～・・・・・か、齧らないの～、・・・・・

「当たり前だよ、俺について来いよ、大事にするからよ、」

「良いの、私で、・・・・・?」

「あ～この時を待ってたんだ、・・」

「・・・・・・・・・」

「なぁー由起恵さん、一緒に大間にいくべよ、今日さぁ～、」

「えっ、大間ー、・・・・・どうして?」

「うん、親父と母ちゃんに、紹介したいんだ。」

「急なのねー、???」

・・・・・・しちゃったし、・・・・・・どうしよ、・・・・・・・

母の顔が浮かんだ。と、同時に父の顔も浮かんだけれど、直ぐに、頭から消した。

・・・・・・故郷に帰って来ても、温かい家庭なんかないわ、弟も帰って来ないし、・・・・・どぷしよ、・・・・・・・

「あん、も、もう止めて、・・」

「するぞ、なっ、するぞ、我慢できなくなってきた。」

「もう、駄目～、もう、朝なのよ、・・・」

「だ、だめ～、あっ、あああ～」乳房を吸われながら、下半身を裸にされてしまった。朝の冷たい空気が、肌にひんやり沁みる。
「あっ、広げないで、」そう言ってみたけど、広げられた、脚の中に、入って来て、そのまま、前戯も無しに、
「あっ、だ、だめ～、うっ、うっ～ん。」差し込まれていた。深く押し入って、動かない。私は、その感覚を追った、目を閉じて。

須川君は、青森駅から、下北バスに乗って、実家のある雪の下北に向かって行ってしまった。私は、見送って、暮れの飾り付け等で賑やかさがある新町通りを、走り去るバスが見えなくなるまで雪の中に立ちすくんでいた。何故だか、途方に暮れている自分がいた。

・・・・・・抱かれちゃった、抱かれちゃった、今朝も・・・・・・・・・・・・

昨夜の、今朝の、セックスが、頭から離れない。セックスの最中、いつも抱かれている教授の顔が浮かんでは消えていた。セックスの仕方が、全く違っている。やはり、セックスは、教授の方が上手。でも、それは、仕方が無い事なんだと、ホテルでの朝食を一緒に食べながら、とても満足そうな表情の須川君を見ながら、思った。

・・・・・・明日は、大間に行くんだわ・・・・・・須川君で良いの？ホントに、軽くない？？抱かれてしまって？？・・・・・・そう、しちゃったもん・・・・・・でも、いつまでも、教授に抱かれているわけにもいかないわ・・・・・・奥様に知られてしまったら、・・・・・・・・もう、止めよう・・・

実家

「ただいま～おか～ちゃん、居るの～～？？」
私の実家は青森市内の柳町に在る。父が前妻と結婚した時に、建てた物だと聞いていた。その前妻を追い出したのは、母である。父とは、８歳離れている。若く、青森美人だった母は、父に無理やり犯されて、１年くらい父との関係が続き、私が、妊娠して、前妻を追い出して、この家に入ったらしい。何故、犯されたのかの経緯は、知らないし、母もそこまでしか言わなかった。
　家の中は、未だ朝なので、冷え冷えしている。
「おか～ちゃん、寝てるのー？？」私は、母の寝室のドアーを開けた。
「あ～由紀ちゃん、・・・お帰り、今起きるねー」と、母の声がした。
「具合悪いんだったら、寝てていいわよ、」
「今起きるから、」と言って、母は、布団から抜け出した。
「昨日、お父ちゃん来てたでしょ、珍しい事も有るんだ、」と、吐き捨てるように言いながら、会いたくない、見たくもない顔を思い出す。
「近頃、ちょくちょく帰って来て、泊っていくのよ、」母が、髪を整えながら、嬉しそうに言う。
「女の人と、喧嘩でもしたんでしょ、」
「由紀ちゃん・・・・・」

・・・・おか~ちゃん・・・・あんな父が・・・・・止めよう、考えるのは、・・・・

「明日、下北に行って来るわ、」
「え～どうして？？何か用事でもあるの？？」と、怪訝そうな表情で言うから、
「うん、彼氏が出来たの、・・・・」

「えっ？そうー？」
「嘘よー、大学のお友達がスキーしようって誘われたの、陸奥の釜伏山よ、一泊して来るわ、」
「寒いよー下北でしょ、あんな辺鄙なところに行かなくても、青森にもあるでしょうスキー場、」
「冬は、あんまり行きたくないんだけどね、あちらには、」と言いながら、昨日の出来事が、頭の中でコマ送りのように動き始める。

・・・・・・しちゃったもんねー・・・・・・・

「今晩は、いるんでしょ、じゃーこれから、古川の市場で、何か美味しい物買わなくちゃ、」
「良いわよ、普通で、」
「年越しの準備もあるから、一緒に行って、」
「はいはい、じゃ、おか～ちゃん、準備して、その間、私の部屋で、明日の準備してるはんで、」
津軽弁が自然に出た。札幌にいる時は、「札幌弁」が出てくる。札幌弁といっても、良く聞く言葉しか知らない。語尾に、「美味いっしょっ、」とか。

・・・・・ふ～ん、部屋は、そのままなんだ・・・・・・

冬の青森、今年は、雪が少ない。毎年、大雪が降る青森。兎に角、雪が降り、振り積もる青森市。そんな、北国の青森に産まれ育った。青森市の人口は、だいたい２４万人くらい。県庁所在地。海の向こうは、函館、北海道。「内地」と、北海道の人達は本州を呼ぶ。初めて、その言葉を聞いて、新鮮な、感覚を覚えた記憶がある。私が、まさか、北海道に行くとは、思ってもいなかったけど、何故だか、

海を渡っていた。地続きの他県より、海の向こうに渡って、何を期待したのかは、分からないけれども、縁を切りたかったのかもしれない、この青森と言うよりも、父の住む町と。でも、縁は切れないで、又、帰って来た。それが、故郷なのかもしれない。

外には、小雪が舞っている。正月の準備の為の人間で、賑わっている。

「久しぶりだわ〜〜、古川の市場、変わってないわ〜〜」

「何にも変わって無いわよ、さぁーお刺身とか色々、買いましょ、」

母は、嬉しそうだった。

青森の駅前に在る、新町通りや、「古川の市場」一体は、高校時代には良く遊びに来ていた場所だった。本州から北海道への連絡船の出発駅であり、北海道から本州への入り口駅でもあるから、人の流れは、多い。この古川の市場周辺には、商店街やデパートや、映画館が在り、高校時代には、必ず、遊びに来ていた場所。

・・・・・・彼は、元気でいるかしら??・・・・・・・・・・

遠い昔の事ではなかった。私の通っていた高校は、女子高校だったから、いつも周りにいるのは、女の子ばかり、だから、若い男の先生が、やはり、人気だった。教え子と、卒業後に、結婚した先生もいたらしいけど、私の高校時代の同窓生には、いなかった。女の子の話題は、もちろん、芸能界のタレントと、男の子の噂。結局、高校時代には、恋人が出来たわけでも無くて、何にも記憶するような出来事は無く終わってしまった。同級生や先輩の中には、男の人と深いお付き合いをしているらしい噂を、何回か聞いたけど、それは単なる噂で、いつか消えて終わっっていたような気がする。だから、高校卒業と同時に、異性への憧れが、憧れで無く、身近な現実として目の前に現れだすと、堰を切ったように、心も身体も開放的になってしまったような気がする。その心の隙間に、教授が、上手

に入り込んで、知らないうちに、私の、処女を奪い、その大人のセックスで、翻弄し、私の身体を、自由にしている。

下北半島

下北半島

下北半島、この地の冬は、とても厳しい。バスの窓から見える左側の海は、鉛色のように暗い色をしている。風が海面を強く叩いて白波が立っている。その暗い鉛色の荒れた海に、止む事の無い雪が遠慮なく落ちている。

青森から、下北行きのバスに乗って、浅虫を過ぎ、野辺地の町を通り過ぎて、いよいよ陸の孤島と言われた、下北半島の、陸奥ハマナスラインを、北上している。明治維新で、敗れた、会津藩は、福島の会津に残った地元民と京会津と言われる会津衆に別れて、この野辺地町を拠点に、未開の地に移り住んだ。その藩の名前は、斗南藩と、何かの本で読んだ記憶が有る。何も無い土地に追いやられた、会津衆は、下北で、悪戦苦闘したらしい。だから、この下北のイメージは、私には、暗い。

殆ど一本道のハマナスラインは、夏は、ドライブには、最適だけど、この真冬の時期に、下北に行くのは、命がけのような気がする。下北半島の中心市は、むつ市で、下北観光の拠点。そのむつ市に、スキーが出来る山が有る。その山の名前は、釜臥山。

雪は、絶えず、落ち、地吹雪で、前が見えなくなる。地吹雪と言えば、雪が無いところでは、理解しないかもしれないけど、横殴り風で飛ばされ舞い上がった雪で、一寸先が見えなくなるほどの、雪の壁そのもの。特に、津軽平野での地吹雪は、体験観光として有名だけど、このハマナスラインの地吹雪も相当に酷い。雪と海しかないこの地に、ところどころに、民家が見える。民家が見えると、なんだか心が落ちつく。

・・・・・一人じゃ、絶対に来たくないわ、・・・・・・特に、冬は・・・・・・・

高校時代にドライブに誘われ、このハマナスラインを走ったのは、暑い夏だった。あれは、遠い思い出。あの時は、お友達の家族に誘われて尻屋崎に行った。そう、尻屋崎は、本州の涯、絶えず風が、襲いかかる地。有名な寒立馬が、いる地。夏は、良いけど、冬は、訪れたくはない土地。それでも、下北半島には、人間が住んできた、今でも、これからも。それが、その地に、生まれた、人間の宿命なんだろうと思う。私の故郷は、青森市。父もいれば、母もいる。青森県出身という暗いイメージは、重い荷物を背負っているように感じられたが、それも、札幌で生活してみて、少しずつ、消えて言ったような気がする。

バスは、雪の壁に向かって走っているような気がする。運転席のフロントガラスに、絶えず雪が強い風と共に襲いかかって、時には前が見えなくなる。すると、雪の切れ間を待つように、バスは、その場に立ち止まり、前が見えるまで待つ事を、何度も繰り返す、今日は、最悪の日のように感じられる。

昨夜は、父が、家にいた。会いたくは無い父が、家にいた。

・・・・・昨夜は、父が、家にいた。会いたくは無い父が、家にいた。・・・・・・

年の瀬に、父が家にいた。どんな家庭でもそれが普通なんだろうけど、ある時を境に、父や母と一緒に、正月を迎えた事は無い。いつだって母と弟と、三人だった。父が居ない正月が、毎年の恒例、それが、我が家では正常、母子家庭そのものだった。その現実に慣れると、それが、、普通の年の瀬だから、何も、感じなくなっていく。誰も、触れようともしなかった。慣れは、恐ろしい。

その年の瀬に、今年は、何故だか、父が家に居た。居心地が悪かった。窓の外を、見ながら、昨夜を思い出している。

・・・女にでも、ふられたか・・・・・

父を見るなり、そう思った。

・・・・女にでも振られたか～直ぐにそう思うのは、しょうがないわ・・でも、そんな、年の瀬に居たことのない、父の存在に、母は嬉しそうだったし・・・

むつ市

青森県の下北半島、雪風の通り道、人口密度の極端に希薄な地。それでも、人間は、この狭い国土の至るところに住んでいる。むつ市は雪の中に在った。むつ市がどのくらいの雪が降り積もるのかは、全く知らないけど、青森市内に降り積もる雪の量は、膨大。そんな暮らしを子供の頃より過ごしているから、雪のむつ市を見ても、何も感じない、ありふれた、冬の景色だ。

バスは市内の中心部にある、下北観光バスのターミナルに到着して、バスから降りると、下北の匂いがした。匂いと言っても表現のしょうがないけど、青森市とも札幌市とも函館市とも違う、山の匂いと海の匂いの混じったような、多分、私だけなんだろうけど、最初の土地に降りると、私は、その地の匂いを味わう、嗅いでみる。

「お～ここだ、あ～由紀恵さ～んを、お～来たな～」と声がした。・・・・そ、そんなに、大きな声で・・・は、恥ずかしいでしょ・・・・

「もう、す、須川・・・・？えっ！」

そこには、確かに年配の男女がいた。

「い、いやぁ～よぐもまぁ～こんないながまでの～よぐ来てけで、」と男性、直ぐに

「うだぁさ～わげぇ～娘っこ一人でなーこんな、いながまでの～」

と女性。
「俺の親父と母ちゃん」と、須川君が紹介する。
「は、初めまして、由紀恵です。」
「

両親

・・・ちょ、ちょっと、す、須川君・・違うでしょ、・・・どうして、こうなるのよ・・・

「なぁっ、親父、美人だべぇー、ここら辺じゃいないべ、」と、毛糸の帽子を頭にチョコンと乗せている須川君の父親に、自慢するように言った。

「博司～言う通りだのぉ、ほんだぁ～流石は、青森だの～津軽美人じゃのぉーのぉーおっかぁーよぉー」父親が母親に同意を求めれば、

「うんだぁさぁー博司がさぁーーいぁーこったら、綺麗だ、お嬢さんだどば、博司にはもったいなぐで、もったいないなぐで、ご先祖様にのぉーあっほんだぁー立ち話は寒いはで、近くに席ばとってあるからさ、さぁ、遠慮しねで、のっ」」

「うだぁ、うだぁ、何も、ここでなくても、お～さびぃー、さぁー由紀恵さんいくべ、」

私は、唖然として、何も言えなかった。

・・・あっ、いやー須川君、そう来るー・・・

連れだって歩き出した御一行四人様、予約していたお店は、案外直ぐ近くにあったらしく、歩きながら、なんとかこの状況を把握しようと頭を回転させてきたけど直ぐに着いてしまって整理どころか混乱が増してきたような気がしていた。

・・・須川君、なんぼ、なんでも、まいねぇっ、まいねぇっじゃ、須川君・・まだ、なも、考えれねじゃ・・いくら親を紹介したいと言ったって・・・頭の整理・・・いきなりじゃんさぁー、・・・心

の準備とか、・・・私も、一応、
女の子よー・・・

お寿司屋さんの中は、とても暖かった。直ぐに上着を脱ぎながら、ご両親が席に着くのを待って、私と須川君は下座に座った。

・・・・・あ～慣れないわ～・・・こんな筈じゃなかったわぁ・・・・・・

「いやーよく来てけだのぉ、うんうんよく来てけだ、うんうん、わだしが、博司の父です。母親の静江、後は、妹が一人に弟が一人に、爺様(じさま)と、婆様7人家族なんですが、宜しく博司を頼みます。」
「はぁ～はい、由紀恵です・・・こちらこそよろしくお願い・・・致します・・」と、何が何だか分からない内に挨拶をしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0978c/

由紀恵

2011年10月29日21時45分発行